

## JICA国別研修「南アフリカ 障害児および家族のためのレスパイトケアサービス拡大プロジェクト」報告

びわこ学園医療福祉センター草津 医療部長 / 永江 彰子



2025年7月7-9日の3日間、国際協力機構(JICA)国別研修「南アフリカ 障害児および家族のためのレスパイトケアサービス拡大プロジェクト」を、びわこ学園法人全体で引き受けました。高谷清旧第一びわこ学園（現びわこ学園医療福祉センター草津）前園長著「はだかのいのち」をJICAスタッフが読んだことが、びわこ学園での本研修のきっかけになったと聞きましたので、研修冒頭で40年前の「抱きしめてBIWAKO」をご紹介します。

はるばる13,300kmの距離(びわこ外周235kmの約56倍)から、日本に研修を受けに来てくださると聞いた時は、これからの体験に心が躍りました。準備期間は3か月、ベトナムで青年海外協力隊経験のある内藤リハビリ課課長、JICA日下部氏、およびアイ・シー・ネット株式会社小林氏と計4名でオンラインにて研修プログラムを練り、下記関係者とプログラムを共有し、さらに自分自身も研修スライドを準備するという日々を過ごしました。

本研修の対象者は、南アフリカ中央社会開発省局職員やNPO関係者（居宅介護従事者、通所デイケアセンターのスタッフ、障害児の親等）社会開発事務所職員15名(内、車いすユーザー1名)と、JICA関係者等同行者7名の合計22名でした。



初日：すぐに作れる  
感覚おもちゃの紹介

初日午前は、やまびこ子ども療育センターやまびこ園（大津市）のご協力を頂いて、中村隆一先生（人間発達研究所所長）「障害児支援の歴史を知る。大津方式と大津の療育の歴史」、石川孝子先生「現代の障害児療育支援サービスの流れ」、および、林美和先生「大津の療育 やまびこ園について」の座学研修とやまびこ園内の見学でした。療育教室（やまびこ園）でのスタッフの温かい歓迎と子ども達の素敵な笑顔で、一気に緊張が緩みました。午後は口分田施設長の歓迎のあいさつからびわこ学園でのプログラムを開始し、武居びわこ学園障害者支援セ

ンター（以下、びわセン）所長「滋賀県の障害児者生活を支援する民間および行政のとりのくみ」と、永江「障害児者発達保障の思想」の座学研修がつづきました。創設者糸賀一雄先生提唱の「この子らを世の光に」の理念と、岡崎英彦初代園長のことば「本人さんはどう思てはるんやろ」を、医療と福祉の両視点から語りました。



2日目：センター草津での  
研修開始

2日目は、多久島氏（びわセン）および武居所長のご協力を得て施設（訪問看護ステーションちょこれーと。・多機能型事業所ちょらんど、生活介護事業所ピース、センター草津外来・病棟・リハビリ課）を見学していただきました。研修者を4グループに分けて、びわこ学園法人内のさまざまな施設を見学頂き、現場の様子とエネルギーを感じてもらえたと思います。利用者衣服の再縫工の様子に研修者が感激され、「自国にこの発想はありません。」と、記念に持ちかえられたり、リハビリ中の車いす男児の「今日は僕の誕生日！」発言(英語です)に対し、研修者の盛大な拍手とサプライズのプレゼントがあったりと、現場スタッフだけでなく、外来病棟利用者や家族とも、さまざまな異国との触れあいがありました。



3日目：個別支援計画作成の様子

さて、3日目は、滋賀県重症心身障害児者・医療的ケア児等支援センターこあゆの増野法人事業企画部課長、村井氏、および園田氏のご協力を得て、サービス等個別支援計画の講義と実習のプログラムとしました。また、この日は、厚生労働省での勤務経験がありかつ、医療的ケア児の支援に長く関わっておられる埼玉医科大学総合医療センター小児科奈倉道明先生のご協力も頂きました。午前中は、「個々の障害児者の生活をプログラムする方法」1)日本の障害者支援サービスの位置づけ、2)サービス等利用計画と個別支援計画の策定方法の2テーマをそれぞれ、

奈倉先生と増野課長より座学で研修、午後からは、南アフリカの実際の症例に対して個別支援計画を作成し、発表するという研修の集大成でした。びわこ学園での3日間の過ごしで、研修者の皆様とスタッフはすっかり打ち解け合い、意気投合して、双方に実りある実習となりました。特に、最終日となった3日目には、研修者皆様が正装で参加され、昼食後にはレイボスティとお菓子でのお茶会、素晴らしいリズム感の南アフリカのダンスと日本の踊り…と、話はつきませんでした。

異国の文化に触れ、自国のことをさらに深く知り得た貴重な機会でした。今回お引き受けした本プロジェクトにご興味のある方はぜひ、永江までご連絡ください。



3日目昼食後：正装南アフリカ勢からダンス



3日目昼食後：日本勢から盆踊り